

ロバート・ヘンリソン作、「オルフェウスとエウリディケ」

安藤光史 西納春雄 訳

序

本訳稿は、1988年3月に『主流』第49号紙上を借りて発表した『クレセイドの遺言』に続く、ロバート・ヘンリソンの小品の翻訳である。ヘンリソンの人物、作品、作風については『クレセイド』の序に略記しておいた。また後述するデントン・フォックス編の作品集の序及び注釈にその詳細を参照されたい。『クレセイド』が、恐らくはヘンリソンの創作になる作品であろうと推測されるのに比して、この『オルフェウス』は、寓話部分の基本的構想をボエチウスの『哲学の慰め』に、またそれに続く教訓部分は、『慰め』への、ニコラス・トレヴィットの注解に依拠している。しかしながら、寓話部分の脚色とトレヴィットからの借用は、ヘンリソンの豊かな詩的資質と、彼の作品の特色である、きわめて真摯で誠実な処世観を明らかにしている。

この詩の前半の寓話部分は57連からなり、そのうち52連がライム・ロイアルでうたわれている。押韻はきわめて厳格に守られる。破格部分はオルフェウスの訴えを描写する5連であるが、ここでも一連10行の詩行に、aabaabbcbcの押韻が厳密に守られている。後半の教訓部分は8連よりなり、行数は6行から40行と変化に富むが、すべて弱強5詩脚2行押韻の詩行で構成されている。底本として用いたテキストは『クレセイド』と同様、Denton Fox. ed. *The Poems of Robert Henryson*. Oxford: The Clarendon Press, 1981. である。紙数の都合で訳注は割愛せざるを得なかった。翻訳の助けとなった辞書、注釈書の解釈と訳者の読みを比較して、別稿として発表

できることを願っている。訳出にあたってはできる限り原作品の構文と行分けを尊重することを念頭においた。固有名詞の表記は現代英語式発音を尊重しつつ、ヘンリスンの綴字の響きを生かすことを試みた。

『オルフェウスとエウリディケ』

王侯君子の気高き精神と偉風とを

いや増さんと望むものは、

まずもって、尊き祖先、高き家柄、

そして、立派な血筋を称揚すべきだ。

祖先の高貴さを繰り返しくりかえし聞くならば、

5

その者は美徳や様々な徳目に

さらにいっそう心を傾けることにもなるうからだ。

高貴な血をひく者が、祖先の

洗練された作法や貴族の身分に

したがわず、墮落するのは

10

自然の法おきてに反することだ。

王の血をひきながら悪行を働くものは、

人でなしとして軽蔑され

恥辱を受けることになる。

私はギリシアの偉大な王侯の例ためしをふまえてこう言うのだ。

15

彼らは全身全霊を傾けて

祖先の歩んだ足跡を立派にたどり、

高き血筋の誉れをいや増した。

それは、老いて真摯な賢者たちが、

生意気な若者たちの導者となり、
彼らをすべての美德にひいでる者としたからだ。 20

ちょうど流水や湧水が
その源泉の香気を湛えるように、
ギリシアでも、一人ひとりの王侯が
祖先から馥郁^{ふいく}たる資質を受け継いだ。 20
私はそのような君主のひとりの物語をしようと思うのだ。
が、まずはじめにその高貴な生まれを、
誤りは正していただくとして、くり返しておかねばならない。

全アラビアで名も高き
エリコーネ山に、 30
美しきことただならぬ女神が住んでおられた。
血筋貴く、メモリアと呼ばれ、
かの神ジュピターがこれを妻となし、
彼女の体を知ると、とき満ちてある日、
この女神は玉のような九人の娘をなした。 35

第一の娘は、ギリシア語で、エウテルペーと呼ばれた。
その意味は邦語で、快樂という。
二番目の娘はメルポメネーと名づけられ、
蜜のように甘い音楽をつかさどる。
テルシコールは三番目の娘で、 40
万事の知恵に長けている、と、
かようにギリシア語よりラテン語に訳される。

才女カリオペーは、
四番目の娘。あらゆる音楽をつかさどり、
オルフェウスの母となった女神だが、
その子オルフェウスはやがて婚儀によってトラキアの王となる。
クレオーは五番目の娘。今日では
ラテン語で、被造物への思慮
と呼ばなされる女神である。

45

六番目の娘はヘラトーと呼ばれ、
万物の類するものを友とさせる。
七番目の娘は美貌のポッリミヨーで、
彼女は千もの歌を甘美にうたった。
そのつぎがテリアー。彼女はわれわれの魂に
深い理知と大いなる機知とを授け、
悟力ある者となす。

50

55

ウラニアーは九番目、末娘で、
かりにその名を邦語に移してみれば、
天上の調和、
旋律と楽の音とで人の心を楽しませる。
これら九人の娘のうちで、カリオペーが、
全能の神フェーブスにより冠を授けられ、その妃となった。
そしてこの妃によってフェーブスは王子オルフェウスをもうけた。

60

オルフェウスが、美男にして知恵もあり、高貴にして
心寛くあろうとも、驚くにはあたらぬ。
父は神にして、母もまた、

65

すべての音楽の創造者たる女神なのだから。

彼が生まれたとき、母は彼を膝に抱き

二つの白き乳房から完き音楽の

甘美な乳をこの子に含ませた。

70

やがて長じて成人ともなれば、

身の丈高く、面立ちうるわしく、

その誉れは遠方にまで伝わり広まり、

そしてついには、権勢ならぶべき者なく、

美貌他に優る者ない富無辺のトラキアの女王が、

この若き王子へ使者を送り、

婚儀を結び王となるように求めるまでになった。

75

エウリディケとはこの女王の名であった。

かくも神々しい王子を目のあたりにしたとき、

女王は秘めた胸の内を開くのを恥としなかった。

甘美な言葉と情のこもったまなざしで、

彼女は言った、「よくぞ参られた。オルフェウス様、愛しい殿御。

そなたをこの国の王とも主ともいたしましょう。」

やがて二人は口づけ、かくして心もひとつとなった。

80

オルフェウスと美しきエウリディケの間には

婚儀の結ばれたときから、日ごとに

愛の炎が燃えあがり、

喜びと至福、歡喜と悦楽とに包まれた。

ああ、しかし、いったい何と申せましょう。

この世の喜びは、美しく咲き出たかと思えば、

85

90

たちまち色褪せ、悲しみとともに生命尽きる花のごときもの。

このことを私はエウリディケを例に申しあげよう。

彼女は五月の朝に、侍女ただ一人を従えて、

緑の草萌える野原へ、露を採り、

咲き出る花を見ようと踏みだした。

95

が、その繁み、この若い王妃のすぐ傍らに、

アリストイオスというならずもの牛飼いが

家畜を見張りながら、藪の根本に寝そべっていた。

男はこの王妃がたったひとり、

雪より白い脚を露わにしているのを見ると、

100

たちまち欲情にそそのかされ、この女を

わがものにしようと思い、近づいた。

危害を恐れて、彼女は彼に気づくや逃げ出した。

やがて素足で繁みを逃げるうち、

彼女は毒蛇を踏みつけたのだ。

105

情け容赦のないその毒は、すべての猛毒の

本性そのままに、激しく体中に広がり、

この女王の心臓を粉々に砕いてしまった、

たちまち彼女は気を失い息絶えた。

この事態を見て、冥府の女王と呼ばれる

110

プロセルピーナが支度をととのえ、

その宮殿にこの高貴な王妃を招き入れた。

王妃の姿がこつぜんと消え失せると、

一緒にいた乙女は泣きじゃくり、
恐ろしいほどの大声で泣き叫んだ。

115

ついにオルフェウスもこれを聞きつけて、
彼女の泣きわめく理由^{わけ}を尋ねた。

乙女は言った、「ああ大変、お妃様が、エウリディケ様が、
私の目の前で妖精に連れ去られたのです」と。

この気高い王は、憤怒で全身炎と化して、
飢えた獅子のように形相すさまじく怒り狂い、
目は炎のごとく燃え上った。

120

ことの次第を尋ねるに、乙女は答えた、

「お妃様は毒蛇をお踏みになり、
気を失って倒れられたのです。そこへ妖精の女王が現れて
お妃様を抱きおこすと、そのまま連れ去ったのでございます。」

125

彼女が語り終わると、王はつらい悲しみの溜息をもらした。

彼の心臓は悲しみと嘆きで張り裂けんばかりであった。

半狂乱の態で、もうじっとしておれず、

彼は豎琴をとると森へと向かった。

130

両手をもみしぼり、行きつ戻りつしたものの、
ついには立ち止まり、やがて石に腰をおろすと、
豎琴をとって、こんなふう^{よう}に悲しみを訴えた。

「おお、嘆きの^{いと}絃あまた張りたる悲しみの豎琴よ、
おまえの歓喜の調べをみな嘆息に変えよ。

135

おまえの優雅で甘美な歌もみな止めよ。

さあ、この私と一緒に泣いてくれ、

この世の喜びをすっかり失くしたおまえの主人, 悲しみの王とともに。
すべての楽しみを悲嘆と涙に変えよ。

おまえの黄金の絃巻を涙で濡らし, 140
ひたすらに私の苦しみを語るのだ。
行く先々で, 辻々で, 私とともに泣き叫べ,
『ああ, 愛しきエウリディケ, いま何処どこに』と。』

オルフェウスを励まそうと, 豎琴は快活な調べかなを奏でた,
すると王の大いなる悲しみを減じようと, 145
森の鳥たちは歌い,
木々は緑の葉を震わせ舞い踊った。

しかし虚しいかな, これらは少しも王の気を晴らしはしない。
それほど彼の心は美しい妃の上にあったからだ。
血の涙がその眼まなこより湧き流れ, 150
その鳴咽を止める慰めとてさらになく, 氷の悲しみを胸に,
オルフェウスはただひたすらに泣き叫ぶ,
「ああ, 愛しきエウリディケ, いま何処どこに」と。

「さらば, 私の宮殿。さらば, 快樂よ, 歓喜よ,
そして来たれ, 荒涼たる森よ, 道なき道よ, 155
この残酷な運命の定めを荒野で忍ぼう。
この王衣も豪華な衣類もことごとく
灰色の弊衣になれ。

この王冠は, 被りもののない頭となれ。
海狸ビーバー, 狸, 熊の皮をあしらったこの寝台は 160
猛き野獣のあまた棲む藪すみかの中の住処となれ。
歌も忘れ, つらい溜息ながらに, 私は叫ぶ,

『ああ、愛しきエウリディケ、いま何処に』と。」

「お願いです、父フェーブスよ、
そなたの嫡子オルフェウスを憐れと思し召せ。 165
私があなたの子、息子なるをご存じないか。
どうぞ私の嘆きをお聞きください。辛く哀れな嘆きを。
このように罪もないのに欺かれた私を導いて、
惨めな死から遠ざけてください。
あなたのお顔が雲に覆われないようにしてください。 170
私にあなたの^{あかり}光明を貸して、道に迷わないようにしてください。
かつて不名誉を被ったことのない名声の美女、
わが妃にして愛しき人、エウリディケを捜し出すために。

「おおジュピターよ、天上の神にして
祖父たるあなた、私はあなたにお願いいたします。 175
この悲しみを、このうめくほどの嘆きを癒してください、と。
彼女を捜しだすまで挫けたり、倒れたりせぬ
力を私に授けてください。なんとしても彼女を捜しだすのだから。
巨木にも岩にもひるんだり立ち止まったりしないような力を。
あなたの神通力で、私を彼女が連れ去られた所へとお導きください。 180
彼女の姿をあらわしてください。そしてこの心に平安をお与えください。」
このように、オルフェウス王は豎琴を手にしたひとり、
妃エウリディケを求めて痛々しく泣くのだった。

嘆きの歌を歌い終えると、
彼は豎琴をとり、胸に吊るした。 185
そして、物語の伝えるように、天上へと

妻を求めて行くのであった。しかし、それは徒労だったのだ。

天の川に沿って彼は進んだ。休息もとらずに、

やがて彼は厳寒疾風の父、

老サターンの天球層に行き着いた。

190

その酷寒の地に彼女を捜し求めた後、

今度は祖父ジュピターのもとへと彼は向かった。

祖父は彼の嘆きをひどく哀れと思い、

その天球層をくまなく捜させた。

が、そこにも彼女はいなかった。

195

つぎに彼は戦争と闘争の神、マルスのもとへと降り、

その天球層を捜した。しかし、彼女は見つからなかった。

つぎにオルフェウスは父フェーブス、

光まばゆい太陽神のもとへと降りる。

父は実の息子のオルフェウスの

200

このような悲しみようを見て、すっかり顔色を曇らせるのだった。

すぐさま彼は、その天球層をすっかり捜させたが、

それも無駄なこと、妃はそこにも見当たらない。

そこでオルフェウスは暇を告げると、今度はヴィーナスのもとへとむかう。

彼女を見ると、彼はひざまづいてこう言った、

205

「私があなたの^{まこと}真の騎士であることをあなたにご存知のはずです。

愛することでオルフェウスほど誠実な者はいないことを。

あなたは愛の女神、最強の力をお持ちのお方。

なにとぞ、慕う人をひと目見るのをかなえたまえ。」これにこたえて

彼女は言う、「まこと、あなたはさらに低い所を捜すべきです」と。

210

そこで彼はすぐさまヴィーナスのもとを辞した。

オルフェウスはすぐに雄弁の神と聞こえた
マーキュリーのもとへ行く。

しかしそこでも妻のことは何も知れなかった。
悲しみに沈んだオルフェウスはさらに下る。

215

月には留まらず、
こうして彼は天界から地上へと降り立ったが、
その道すがら彼はある施律を習い覚えた。

すべての惑星をめぐる旅路で、
彼は天上の楽の音を聞いたのだ。

220

いかなる楽器をもしのぐ、
天球の回りめぐりで奏でられる楽の音を。
その和声は、この世にあまねく、
永遠に、その動きの止むまで唯一なるもので、
これをプラトンはこの世の魂と呼んだ。

225

オルフェウスは、ドゥブラー、トリプラー、
エペトリトゥス、エモレウス、クェドルプラーテのような
調和のとれた音と、エボグディウスという
まさに軽妙な音を学んだ。

そして、学者たちの説明するように、
甘美にして喜ばしいこれら六つの音をもって、
まさしく調和のとれた五つの天上の和声ができあがるのである。

230

まず、ディアテッセロン、確かにこれは甘い響きだ。

そして一オクターブのディアパソンと二オクターブのディアパソン、

次にディアペンテとディスディアペンテ。

235

こうして三つの音が掛け合わされて五和音となる。

偶奇数を完備して、

快く、甘美な楽の音は、

天体の巡りによって生み出されるのである。

このような音楽について書くなどは、愚を重ねるばかりのこと、

240

だからこんな話題はやめにしよう。というのも、一生かかっても
そのような音楽のひと調べだに、私に歌えようはずがないからだ。

それより、オルフェウスが妻を捜して

いかに暗い森を行ったのか、その様を語ることにしよう。

凍え、飢えて、いくつもの荒野をすぎて、

245

案内もなくただひとり、豎琴だけを伴^{とも}として行く様を。

オルフェウスは20日の旅程を進んだ。

もう私には申し上げられないほど、遙かなたまで行ったのだ、

彼はいつも様々な近道を探し、

やがて、ついに冥府の門前へと行き着くと、

250

そこで恐ろしい門番に出会った。

それは冥府の番犬で、三つの頭を持ち、

ケルベロスと呼ばれるおぞましい怪物だった。

オルフェウスは

その恐ろしい冥府の犬を見て、戦慄した。

255

彼は豎琴を手にとり、一心に奏でた。

すると、その甘美な音色に、

犬は地面に伏して眠ってしまった。

そこでオルフェウスはこっそりとその腹をまたぎ越えたが、
これから申す通り、それより先には進めない。

260

つぎに彼は驚くほど深い川にさしかかった。

川には橋がかかり、その上に三人の姉妹がいる。

彼女らが橋の入口を守っているのである。

この三姉妹アヘクトー、メイガラ、ティシフォネーが
大車輪を回す様は、見るも恐ろしい。

265

車輪にはイクシオンという男が縛りつけられて、
ぐるぐると回され、ひどい苦痛に苛まれている。

そこでオルフェウスが、心地よい曲をひと節奏でると、
三姉妹はたちどころに眠りにおち、

恐ろしい大車輪も回転を止めた。

270

こうして入口を見張る者はひとりもいなくなった。

するとイクシオンは車輪から這い出して、

こっそりと逃げて行く。

オルフェウスはすぐさま一気に橋を渡った。

ほどなく彼はすさまじい急流にさしかかった。

275

川は深く、渦巻き、激流となって流れくだる。

そこには一糸まとわぬタンタルスが、喉を渴かせて立っている。

水は顎の上を流れいくものの、

大口を開いても一滴の水も口には入ってこない。

水に潜ろうとすれば、水位は下がる。

280

かくして彼は渴きを満たすも癒すもかなわない。

また、彼の面前には林檎がひとつさがっていた。

口もと間近に、揺れる糸に吊るされて。

彼が大口を開けば、それはあちこちと揺れ動き、

彼が食すのを避けて逃げるのだ。

285

オルフェウスは彼の窮状に憐れみを抱き、

豎琴をとり出して、一心にかき奏らす。

すると水は鎮まり、タンタルスは飲むことができた。

つづいて彼は鋭い^{いばら}荆棘の生い茂る荒野を越え、

たったひとり泣きながら、淋しい道をたどって行った。

290

豎琴が心の支えとなってくれたが、辛さはひとしきり。

彼は鋭いとげに刺され痛々しい傷を負った。

ふと傍らを見やれば、大地に

男が釘打たれて磔けられ、たいそうな苦しみをうけていた。

男は名をティシウスと言った。

295

彼の胸には一羽の恐ろしい秃げ鷹がとまり、

その嘴で彼の臓腑を引き裂いていた。

胃袋、横隔膜、心臓、さらに肝臓、腸と

鷹は容赦なくつつきだし、男の苦痛は増すばかり。

オルフェウスは彼のこの激しい苦しみを目にすると、

300

豎琴を手にとって、甘美な歌を奏でるのだった。

すると秃げ鷹は飛び去り、ティシウスの叫び声も止んだ。

この荒野を越えると、闇夜のように暗い不気味な道となった。

通ることは危険きわまりない。

そこはつるつる滑って、立ってられないほどだ。

305

闇に漂うすさまじい臭気が
 彼を恐ろしい冥府の王宮へと案内する。
 その王と妃は、ロドマントスと
 プロセルピーナ。そこへオルフェウスは入っていった。

ああ、なんという陰鬱な所か。深く底なき地下牢。 310

耐えがたい悪臭を放つ火炉。

赦免のない絶望の監獄。

おまえの糧が毒なら、その飲物も毒。

与える苦痛は数え切れない。

ここに住みに来た者は、いかなる者も 315

常に死に臨みつつも、決して死にきれない。

そこに彼は、燃える焦熱のブロンズの冠を頭上に戴いた

悲しみに沈む王や妃を見た。

彼らは地上の権力者たち、

そして黄金、富、国土の征服者たちだった。 320

オルフェウスはそこにトロイのヘクトールとプライアムを見た。

それに不正な征服を果たしたアレクサンダー大王も、

汚れた近親相姦の罪を犯したアンティオカスもいた。

ユリウス・カエサルはその残忍さ故に、

ヘロデ王は弟嫁と一緒に、 325

ネロはその邪悪のために、

ピラトは法を曲げた咎で。

そしてさらに下方をのぞいたオルフェウスは見た、

この地上に無双の権力を誇ったクレスス王が、

強欲故に煮えたぎる黄金をたっぷり注がれているのその姿を。 330

また彼はそこにファラオを見いだした。

彼は神の民を迫害し、そのために疫病が起こったのだった。

そしてまたイスラエルの民に

大いなる不正を行った故にサウルがいた。

そこにはアカベとその妃イザベルもいた。 335

この者らは、かつて真の預言者であった無実のナボトを

その葡萄園がために情け容赦もなく殺したのだ。

そこでまた彼は数多の教皇、枢機卿を見た。

彼らは神聖なる教会で権利の濫用を行ったのだ。

さらに祭服を着た大司教が 340

聖職売買や不正な押収の廉で、

そして大修道院長やあらゆる宗派のものたちが、

その地位から得た収入を不正に用いた廉で、

燃え上がる焔の中ですさまじい苦しみを受けていた。

オルフェウスはさらに下って、ブルートとプロセルピーナの住処へと 345

向かった。その方に近づくにも彼は、

歩きながらたえず豎琴をかき奏らした。

ついにオルフェウスはエウリディケの姿を認めたが、

彼女は死人のように痩せ細り、憐れをさそう青白さ。

枯れ草のように土気色にやつれ果て、 350

かつての百合の顔色も今は鉛のよう。

オルフェウスは言う、「わが愛しの人、わが喜び、

そなたのかくも変り果てた姿を見るのは、無上の悲しみだ。

そなたの白い頬の薔薇の赤味はいま何処^{いずこ}、

愛しい目差しの、そなたの澄んだ両の眼は、

355

口づけ優しい、そなたの赤い唇は。」

エウリディケがこたえて、「まこと、今はあえてお答え申しませんが、
いつかその理由をお聞かせいたしましょう。」

ブルートが言う、「だんな様、このお方は妖精のような姿になってはいるが、
何も悲しむ理由などはありません。何故というに、

360

このお方もこの私同様に、毎日幸せに暮らしているからだ。

ヘロデ王にしても、共まわりの騎士はみな揃っており、同じこと。

このお方をこんな姿にしているのはひとえに悲しみ。

もし故郷トラキアの宮殿にあれば、

顔形はたちまち元に復することだろう。」

365

するとオルフェウスはブルートの前に坐し、

白き手に豎琴とって、

甘美な旋律数多かき奏らす。

低音部はヒポドリカ調で、

重奏部はヒポレリカ調で。

370

こうしてついには、憐憫と大いなる同情から、

彼を見、聴く者たちは激しく涙するのだった。

さてそこで、プルセルピーナとブルートはオルフェウスに

褒美を求めよと命じた。だが彼は、

ただただ、かくもはるばる捜し求めて来た妻とともに

375

故国へ帰る許しばかりを求めるのであった。

プロセルピーナの言うに、「私があの方をここにお連れした故、
約定なしに手離すわけにはまいりませぬ。」
オルフェウスはこたえて、「確かに、その約定果たします。」

「さてそれならエウリディケの手を取って、380
その道を進むがよい、ただこの罰則を心して。
万一そなたが振り向いたり、一瞬なりとも背後を見るならば、
彼女を冥府へ引き戻し、永遠にとどめ置こうぞ。」
きびしい条件だったが、オルフェウスは喜んで承諾した。
二人はともに歩を進め、嬉しきこと楽しきことなど語りつつ、385
ついには冥府の外門にほどない所までたどり着いた。

かくしてオルフェウスは、幸福に有頂天になり、
熱き思いに思慮も失せ、
心にあるは愛する妻のことばかり、
厳しい約定をすっかり忘れてしまった。390
これ以上何を申し上げる必要があるか、この顛末を申し上げれば、
オルフェウスは背後を一瞥した。するとたちまちプルートが現れて、
彼女もろとも再び黄泉の国へと失せてしまった。

ああ哀れ、オルフェウスの泣き悲しむのを聞くのは
なんと胸破るることか。395
これほど苦心して購った妻を、
ただの一瞥で奪われてしまうとは。
彼は地べたに崩れて、それ以上進む力もなかった。
悶絶して気を失い、しばし横たわる。
再び意識が戻ると、オルフェウスは愛の神に向かって

このように叫んだ。

400

「愛の神よ、そなたは一体何者か。

苦くて甘く、残酷で寛大。

良い目に合わせるかと思えばつらく当たり、

誠実かと思えば本当は裏切りだ。

掟は厳しく、定めは犯しがたい。

405

いかに忠実であっても、そなたに仕える者は、

いつの日にか、そのことを後悔することだろう。

「さても警句は真実であったか。」オルフェウスは言葉を続けた、

「心は宝物を、手は痛む傷を追うもの、

愛の神の行くところ、目が追うは必定』

410

今ごろ悟るとは、ああ情ない。

ただの一瞥で愛する人を失ってしまうとは。」

このように愛の神をなじりつつ、野を越え川を渡り、

悲しい男やもめとなってオルフェウスは故国へと向かった。

物語二教訓ガ続ク

さて、やんごとなき皆々様。ポエチウスこと

415

かの元老は、そのすぐれた慰めの書の中に、

われわれの教訓やよき知識のためにと、

この作り話を書き入れた。

その教えの本体は隠されて、

詩歌の衣をまとっている。

420

だが、トレヴィット先生、即ち、生前

立派な神学者であったニコラス博士は、
この話を利用して、まさに利益と真剣味あふれる
すぐれた教訓を示しておられる。

麗しきフェーブスは知恵の神。 425

その妻、カリオペーは雄弁の神。

この両神が結ばれるとすぐにオルフェウスが生まれた。

彼は肉欲から縁なく自由な

人間の魂と悟性の

知的部分と呼ばれる。 430

エウリディケは、妄想によって浮き沈みする

われわれ人間の情念である。

すなわちそれは、理性を渴望する一方で、

ときに肉欲にむかうこともある。

エウリディケを追った牛飼いアリストイオスは、 435

われわれの心を清めることに余念ない

美德にほかならない。

しかし、われわれが緑の草原をぬけて、

美德から世俗の虚しい快樂へと、

心乱れ、不実の心で逃れ行くとき、 440

毒蛇が咬みつく。つまり、この蛇は、

内からも外からも魂を毒する大罪である。

こうなればわれわれの情念は

死んで卑しい淫欲となりさがる。

そのとき完き理性は、このようにわれわれが欲望に 445

道を誤るのを見て、おおいに嘆き悲しみ、

たちまち天上へ昇り行き、

われわれが天を思って、いつも瞑想のうちに生き、

完き意思と熱き愛を

持つべきだと、教え諭すのだ。

450

だが、天上の世界には欲望の居場所はない。

それは欲望が、肉体にしっかりと縛りつけられているからである。

このゆえにわれわれは、肉欲に駆られ盲目となるとき、

心の目を下方に向けるのであって、決して高みに向かって飛翔する

ことはない。

われわれの欲望が、この世の^{しがらみ}柵、すなわち

455

肉欲や世俗の富にとらえられ、

ほとんど天上に心に向けることがないときに、

一体その充足が高い天球上に捜しだされることがあろうか。

オルフェウス卿よ、そなたは妃を求めてあまりに

高き場所を捜している。が、それはむだなこと。だから降りてくるがよい。460

ケルベロスという、三つの頭を持つ

あのおぞましい怪物の前を通るがよい。

この犬が三つの頭を持つのは、

死の三つの様相を表すためとのこと。

第一に、いたいけな若年期の死、

465

第二に、中年期の死、

第三に、老齢に至っての死。

このようにケルベロスは遠慮なくむさぼり食う。

しかし、われわれの精神が知性と交わり、

雄弁の豎琴をかき奏すとき、

470

すなわち、どの年齢においても、

精神が、意志と情念を、罪や汚れた肉欲から

引き離そうとすると、

この犬はわれわれの魂に咬みつく力を持たなくなるのだ。

第二の怪物はあの三姉妹である。

475

アレクトー、メガイラ、そしてティシフォネーは、

われわれが書物で読むとおり、高慢、

誹謗、悪行にはかならない。

アレクトーは、心の驕り、

メガイラは、口から放つ罵詈雑言、

480

ティシフォネーは、悪行で、

これが大罪を最終的に完遂する。

これら三姉妹はいつも恐ろしい大車輪を回しているが、

これはつまり、世の人々はある時には

車輪高く運び上げられ、大いに繁栄するが、

485

その回転によって、知らぬ間に思いがけずも、

貧しく惨めな境遇に投げ落とされることを

表すにかならない。

その大車輪に縛りつけられているイクシオンについて、

私の読んだとおりを、すこし皆様にお話ししよう。

490

彼は生前ふしだらで、好色だった。

その道にかけては、大胆不敵。

自然の女王、女神たる

ジュノーより身分の低い女は相手にせぬとうそぶいた。

ある日のこと、彼は空高く昇り、

495

ジュノーをわがものにしようとして、彼女を捜した。

ジュノーは彼の来るのを見て、彼の意図をすべて見抜いた。

彼女は天空から雨雲を降ろさせ、

二人の間を遮った。

その雲中へ彼の体内から精がほとばしり、 500

そこから、摩訶不思議、半人半馬の

ケンタウロスが生まれたのだ。

この男のあまりの狼籍をジュノーは不快に思い、

心底いらだち、

大車輪の上で止むことなく回されるように 505

この男を三姉妹のもとへと投げ落とした。

しかし理性と完き知性が、

雄弁の豎琴をかき奏らし、

われわれの肉欲を説き伏せて、

世俗の悦びに関わる思いを捨てさせると、 510

そのとき、われわれの心の驕りは止み、

舌は罵詈雑言をやめて静まり、

罪深い行為は眠りにつくのだ。

こうしてイクシオンは車輪から這いだした。

すなわち、世俗の財を得ようと 515

上に下にうごめく大きな気苦労が

たちまち止み、われわれの気持ちが

鎮まり、瞑想に至るのである。

さきほどお話ししたタンタルスは、

生前は、陽気な宿の亭主だった。 520

ある晩のこと、旅の途中の富裕の神が立ち寄り、

この男に一夜の宿を求めた。

それで男は夕食にと、

可愛い大切なわが子を殺して、

その肉を香料と一緒に煮込んでシチューにし、 525

その神にことごとく振る舞ってしまったのだ。

この唾棄すべき行為のために、男は死ぬと、

たちまち地獄落ちの判決を受け、アケーロンの川に落とされた。

そして、すでにお話したように、

裸で凍え、飢えと渇きに苦しんでいた。 530

飢え渴いたこの男、タンタルスは、

いつでも富の神を迎え、宿に呼び入れ、

肉親である自分の息子の肉を細切れにして煮込み、さし出そうと
心構えている、がつつした貪欲な人間たちを表している。

大変な苦勞をして 535

財布を財貨で満たしておきながら、

己れのために金を費やす気は毛頭なく、

また金を使うような仲間に加わるつもりもまったくない。

ああ、一体この世のどこにこれほどの愚行があるうか。

十分に持ちながら、なおそれ以上をほしがり、 540

気苦勞を背負って、寢床に、食卓にまで持ち込んだあげく、

ため込んだ金を他人が持ち去るまで使わずに置いておくなどという

ことほどの。

そういう輩は夜、安眠もままならない、

貪欲に財を増すことに頭が働くからだ。

だが、あの理性と知性が雄弁の豎琴を奏で、 545

われわれに、この世のはかない榮華を頼り信ずるものたちに

どんな危険が間近に迫っているかを、

つまり、繁榮には三つの残酷な性質があって、

すなわち、苦心慘憺して獲得し、

戦々恐々として守り、 550

悲痛のうちに失われること、を示すならば、
そしてこの強欲の罪を、神の恩寵によって理解するものは、
それが誰であろうと、この上ない不安と
絶え間ない懸念から、そして金を集め
心労のうちに生きることから自由になるであろう。 555
人は望むときはいつでも、
食欲の燃えるような渴きをうるおすように
十分に飲むべきなのだ。

ティシウスは地面に釘づけにされて、
禿げ鷹にその臓腑をついばまれ、引き裂かれている。 560

生前彼は予言の術を
会得することに意を注ぎ、
すべての預言者たちに、将来何がおきるか、
どのような一生、出来事、運命、宿命が地上のすべての人々に
予定されているかを語る術を教えこんだ。 565

予言の神であるアポロは、
ティシウスがその力を濫用したために、
すなわち、ティシウスが
アポロの権能を犯したということで、
彼を冥府へ送った。それでそこに彼はいるわけだ。 570

この顛末を聞くものは、
星の動きを見て、天下に何が
起こるかを詮索するのを恐れるべきだ。
それは皆様にも、いや誰にとっても
分を超えたことだし、事前の確かな原因とて計りえない。 575

ただ神以外には地上の誰ひとりとして知り得ないのだから。

オルフェウスが彼の豎琴を奏でたとき、

すなわち、理性が叫んで、

「ああ、人間よ、愚かな考えをやめよ。

おまえは神となってその役割を引き受け、

580

起りもしないことを予言しようとするのか。

未来は神が、その秘所に隠しておられることなのだ。

全能の神にこれ以上悪行を働いてはならない。

またその予言で神からその権能を奪ってはならない」と語ったとき、

完き叡智は彼の楽の音とともに、

585

偽りの予言をしようところみる魂を蹴散らして、

魔術や予言や呪術や、

さらには星占いの迷信から

われわれの情念を引き上げるのだ。

ただし確固たる真の根拠に立脚して

590

起こる事だけは別として。

そういう事は、その原因が続くかぎり、

偶然ではなく、必然的に起こるもの。

例えば、太陽や月の食や合がそうである。

そういう現象は、真の天文学においては、

595

計算と天球の動きで知れるのだ。

これらを語ることは許されるが、

これ以外の、原因の定まらぬことを

語ることは許されない。

あの恐ろしい道、暗く陰鬱な街路には、

600

無知という雲霧がたちこめていて、

この世のむなしい悦楽と

つかの間の現世のいとなみにとらわれている

人の魂の視力をすっかり奪ってしまう。

魂はそれ自身を見ることがまったくできないので、

605

俗世の欲に従うと、つまづいてころび、

悪をかさねて地獄へと落ちる。

その地獄とは絶望である。

長く罪を犯しつづけた多くの者が落ち込む、汚れた絶望である。

このときオルフェウス、われわれの理性は、深く悲しんで、

610

豎琴をとりあげて、欲望と

際限ない肉欲にむかって、

やめよ、俗世の汚れた歎びをすてよ、と呼ばわった。

われわれの欲望が理性と和して、

罪の所業を嫌い、瞑想の世界を

615

希求するときには、プルートと炎熱地獄の女王は

理性の願いを聞き入れざるを得ない。

かくしてオルフェウスはエウリディケを得たのであった。

だが、これほどの人でも、さらに用心深くして、

十分に注意しなければならない。

620

情に屈して

世俗の欲に働き、

心の視線を背後に向けることのないように。

というのも、そのようなことをするならば、

われわれの心は、俗世の汚れた欲、淫欲に翻弄されていた

625

罪の状態にたちかえり、

理性を男やもめにしてしまうであろう。

さあ、神に祈ろう、われわれの情念が

常に墮落する用意があることを知り、

神に祈るのだ。神がその聖なる救いの御手を差し延べて、
われわれが、完き愛のうちに生きることのできる
恩寵を与えたまわんことを。神の栄光によりて。
かくしてオルフェウスの物語は終わる。